



HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究

課題番号：H 27－エイズ－指定－004

研究代表者：白阪 琢磨（国立病院機構大阪医療センター臨床研究センター
エイズ先端医療研究部長）

研究分担者：鯉渕 智彦（東京大学医科学研究所感染免疫内科 講師）

久慈 直昭（東京医科大学産科婦人科 教授）

秋葉 隆（東京女子医科大学腎臓病総合医療センター
血液浄化療法科 教授）平成 27 年度

日ノ下文彦（国立国際医療研究センター臨床研究連携・
バイオバンク部門長理事長特任補佐腎臓内科科長）

藤原 良次（特定非営利活動法人りょうちゃんず 理事長）平成 27 年度・平成 28 年度

橋本 謙（特定非営利活動法人りょうちゃんず 理事長）平成 29 年度

大山 泰宏（京都大学大学院教育学研究科 研究員）

角谷 慶子（長岡記念財団長岡ヘルスケアセンター長岡病院 副院長）

安尾 利彦（国立病院機構大阪医療センター臨床心理室 主任心理療法士）

村井 俊哉（京都大学精神医学 教授）

山内 哲也（社会福祉法人武蔵野会障害者支援施設リアン文京 施設長）

下司 有加（国立病院機構大阪医療センター看護部 副看護師長）

佐保美奈子（大阪府立大学大学院看護学研究科 准教授）

高田 清式（愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センター 教授）

榎本てる子（関西学院大学神学部 准教授）

江口有一郎（佐賀大学医学部肝疾患医療支援学講座 寄附講座教授）

大北 全俊（東北大学大学院医学系研究科 講師）

研究要旨

HIV 感染症は治療の進歩によって慢性疾患となったが、多くの課題が残されている。厚生労働省は平成 23 年度、後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針の見直し作業班で、現状と課題を明らかにし、今後のエイズ施策の方向性を示した。同作業班の報告書およびこれまでの先行研究の成果を踏まえ、本研究では HIV 感染症および合併症で未解決の課題を明らかにし対策を示すことを目的とする。いずれの研究も現在、未解決かつ重要な課題を含んでおり、それを明確化し対策を示す研究の必要性は高い。研究課題によって用いる研究手法は海外で開発されたものもあるが、国内で HIV 感染症の領域に用いられた事は無く独創的である。複数の施設での調査研究等においては患者の個人情報取り扱いには十分留意すると共に、新たな「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守し実施した。当研究班は 6 つの柱、すなわち柱 1 HIV 感染症の抗 HIV 治療ガイドライン改訂、柱 2 HIV 感染者の生殖医療研究、柱 3 HIV 感染者の透析医療のガイドライン改訂、柱 4 HIV 感染者の精神・心理的課題に関する研究、柱 5 HIV 感染者の長期療養の課題に関する研究、柱 6 効果的な啓発手法の開発研究、その他 HIV 医療における倫理的課題に関する研究を実施した。柱 1 では米国等のガイドラインを参照し国内外の臨床研究の成果および国内での抗 HIV 薬の承認状況を鑑みて毎年改訂した。柱 2 では主に HIV 感染夫と HIV 非感染妻の間での体外受精を用いる生殖医療の実施上で受精機能の高い精子の分離技術などの改良の研究を進めた。柱 3 では現状の HIV 感染症治療の進歩を踏まえ、透析に関わる関連学会で十分に議論を重ねて策定した新ガイドラインやマニュアルを周知および実施上の課題に付き検討を進めた。柱 4 ではカウンセリングの重要性、カウンセラーと精神科

医との連携の在り方、HIV 感染者の心理的課題と対策を検討し、HAND の MRI 所見等の解析も行った。柱 5 では福祉施設、エイズ診療の拠点病院の立場から HIV 陽性者の長期療養につき研究を継続し、看護師等への教育研修方法につき検討した。柱 6 ではソーシャルマーケティング手法を用いて啓発手法の開発を行い、効果測定システムの確立を目指した。いずれも研究分担間で相互に研究を連携し実施した。

平成 27 年度

研究目的

平成 23 年度、後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針の見直し作業班の報告書および先行研究の成果を踏まえ、本研究では HIV 感染症および合併症で未解決の課題を明らかにし対策を示すことを目的とする。

研究方法

研究目的の達成のために次の研究を行った。柱 1 「抗 HIV 療法のガイドラインに関する研究（鯉淵）」では米国等のガイドラインを参照し臨床研究の成果および国内抗 HIV 薬の承認状況を鑑みて毎年改訂した。柱 2 「HIV 陽性者の生殖医療に関する研究（久慈）」では HIV 感染男性と非感染女性夫婦に対する有効な挙児の方法の開発・普及を進めた。柱 3 「HIV 感染患者における透析医療の推進に関する研究（秋葉）」では現状の HIV 感染症治療の進歩を踏まえ、透析に関わる関連学会で十分に議論を行い、透析における感染予防のガイドラインの改訂と周知を行った。柱 4 HIV 感染者の精神・心理的課題に関する研究の「HIV 陽性者の心理的支援の重要性に関する検討（大山）」では HIV 感染者へのカウンセリングを検討した。「精神科医とカウンセラーの連携体制の構築に関する研究（角谷）」では聞き取りあるいはアンケート調査を行った。「血液製剤由来 HIV 感染者の心理的支援方法の検討（藤原）」および「HIV 陽性者の心理学的問題と援助に関する研究（安尾）」ではそれぞれの患者層での心理的課題と対策につき検討を行った。「MRI 画像による神経認知障害の神経基盤の解明（村井）」では HIV 感染者と非感染者の神経認知検査および MRI 画像の比較検討を進めた。柱 5 HIV 感染者の長期療養の課題に関する研究の「福祉施設における HIV 陽性者の受け入れ課題と対策（山内）」では「HIV/ エイズの正しい知識」改定および地域包括支援センターによる受入れ環境の向上にむけ研修会を実施した。「エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究（下司）」

では訪問看護ステーション研修会を実施した。「介護保険施設の HIV ケアと学校基盤の HIV 予防における拡大戦略の研究（佐保）」では看護職・介護職等への研修とアンケート調査を実施した。「地方における病院・福祉療養施設間の HIV 診療連携モデル構築に関する研究（高田）」では地域連携モデルの形成に向け関連施設での研修やアンケート調査を実施した。「HIV 陽性者の地方コミュニティでの受け入れに関する研究（榎本）」では関係職種、患者等でのフォーカスグループミーティングを実施した。柱 6 「効果的啓発手法の開発に関する研究（白阪）」では肝炎啓発をモデルにソーシャルマーケティングによる新たな啓発手法の開発を開始した。「啓発方法の効果の評価に関する研究（江口）」では男性を対象に、一般対象者はインターネット調査、HIV 陽性者に聞き取り調査を実施した。その他の研究として、「急性感染期の診断および治療に関する研究（渡邊）」、「HIV 感染症における倫理的課題に関する研究（大北）」を実施した。研究班全体は白阪が統括した。今年度は初年度であり、各研究では実情把握のための調査を実施した。一部の研究ではガイドライン・マニュアルの作成・改定等を実施した。

（倫理面への配慮）

複数の施設での調査研究等においては患者の個人情報取り扱いには十分留意をすると共に、新たな「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守し実施した。

研究結果

柱 1（鯉淵）毎年度末に、世界の最新のエビデンスを反映させ国内の実情も考慮した治療ガイドラインを発行し、最新の情報を広く提供した。柱 2（久慈）61 夫婦で精液洗浄を行った。95%が ART 実施され、血液中ウイルス量は 95%が検出感度未満であった。顕微授精により分娩例 3 例、妊娠例 9 例を得た。血中ウイルス測定感度未満例の精液中リンパ球中ウイルス DNA の存在、および洗浄・凍結融解後運動精

子回収率向上を検討中である。柱 3（秋葉）透析における感染予防のガイドラインを改訂し周知を行った。柱 4（大山）HIV 陽性者が感染以前からもつパーソナリティ特徴、対象関係のあり方など、多くの要因を事前に評価し考慮する必要があることが判明し、研究の方法論の工夫が必要である。（角谷）近畿圏内の拠点病院の感染症内科医 8 人にインタビューを実施した。ソーシャルワーカーや臨床心理士との連携について満足度が高かったが、臨床心理士の関わりが診療報酬に反映されないのが課題であった。精神科医との連携の満足度はバラつきがあり、薬物依存が併存している場合の受け入れ先に難渋していた。（藤原）今年度 3 名の患者インタビューを実施した。1994 年～1996 年のエイズカウンセラー養成研修会資料を分析した。ピアカウンセラーの養成研修も実施した。（安尾）大阪医療センター通院の HIV 陽性者を対象に、心理学的問題の有無とパーソナリティ特性に関するアンケート調査につき検討した。集団心理療法の準備を行い開始した。（村井）予定症例数の約 3 分の 2 の検査を終了。中間解析にて、健常群に比べ患者群で MRI の脳萎縮領域と一部の神経心理検査の成績低下との間に相関がみられた。柱 5（山内）全国 7 箇所で研修会を開催し、マニュアルに差別解消法、人権、暴露フロー、医療連携、制度面を追加改訂した。（下司）1. 大阪府および北海道で研修会を実施し、研修会後のアンケートでは 62% が受け入れ可能、38% は準備が必要、受け入れ不可能の回答はなかった。スタッフへの教育の必要性が示された。参加者全員が研修会の継続開催を希望。2. 次年度の研修会に向け全国の訪問看護ステーション一覧を更新した。（佐保）研修や出前講義によって HIV 感染症や陽性者への関わり方について、知識や態度の変化があった。（高田）今年度の活動にて各病院や福祉施設間の密な連携が図られ、介護・療養が必要な HIV 患者の受け入れについて前向きな傾向が得られ、緊密に綿密な介護・療養が必要な患者 3 例が受け入れられた。HIV 診療および福祉連携の実態と問題点が詳細に把握できた。（榎本）5 回の研究会を開催し、施設運営の方法、NPO の参加の在り方、HIV 陽性者の高齢化に伴う不安等について医療者・福祉関係者・地域支援者・研究者・HIV 陽性者の間で共有し、関係性の構築の第一歩を踏み出す事が出来た。HIV 陽性者固有の問題として、HIV 陽性者を受け入れる高齢者施設や介護事業所が少ないこと、HIV 感

染を理由に家族や地域社会から疎遠になり頼れる他者がいないことがあげられた。柱 6（白阪）大阪の FM 番組（「LOVE+RED」毎週土曜日放送）で若者を対象に HIV/AIDS 啓発と意識調査を実施した。公式 HP のアクセス数は約 45,000 件で、HIV/AIDS 意識調査は HP で 543 名、番組に関連して中学 3 年生 169 名から回答を得た。（江口）ハイリスク層である MSM（8 名）及び HIV 陽性者（8 名）を対象とした半構造化面接から「本人の陽性リスク認識度によってその行動制御要因は大きく異なる」ということが判明し、インターネット調査（一般男性 1200 名対象 - 含む MSM600 名）により妥当性を検証し確認した。現在、リスク認識度に応じた制御要因を解析している。その他（渡邊）76 症例を対象とした。急性感染期で治療を開始した症例の HIV-DNA 量は慢性期で治療を開始した症例の HIV-DNA 量より低く、約 2 年後も保たれていた。（大北）データベースの分析については、治療及び予防法などの技術及びそれに伴うリスクの変遷により倫理的な議論が変遷した様が明確であった。また検査関連の議論については、海外の議論の変遷と異なり、日本では 2000 年以降の議論に大きな変遷は見られなかった。班全体では、携帯を用いた効果モニターシステム等の開発、HIV 治療の薬剤情報提供ホームページの開発等を行った。ガイドライン、マニュアル等の改訂作業や支援の各種ツールの開発など、初年度は、ほぼ予定通りの成果をあげる事が出来た。

考察

指定研究の初年度であり主に調査や課題の抽出に取り組んだ。ガイドライン、マニュアル、ハンドブック等や支援の各種ツールは実施での評価と改訂を行う必要があると考える。その他、多くの研究から重要な結果を得た。

自己評価

1) 達成度について

当初計画を概ね実施でき目的を達成できた。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

本研究は HIV 感染症の治療等で課題を明らかにし、その対策につき検討を行うものであり、必要性は高い。いずれも学術的意義も高く、国際的にも新規性が高い。治療のガイドライン改訂など、社会的意義も大きいと考える。

3) 今後の展望について

これまでの研究結果を踏まえさらに研究を深める。

結 論

HIV 感染症の治療と関連分野で課題を抽出し、ほぼ計画通りに研究を実施できた。

健康危険情報

該当なし

知的所有権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

研究代表者

白阪琢磨

白阪琢磨:HIV最新情報について解説。読売テレビ「情報ライブミヤネ屋」、2015年、大阪

白阪琢磨:透析医療者のための HIV 感染症の知識。日本腎不全看護学会 東海地区教育セミナー、2015年、名古屋

Yagura H, Watanabe D, Ashida M, Kushida H, Hirota K, Ikuma M, Ogawa Y, Yajima K, Kasai D, Nishida Y, Uehira T, Yoshino M, Shirasaka T. Correlation between UGT1A1 polymorphisms and raltegravir plasma trough concentrations in Japanese HIV-1-infected patients. J Infect Chemother. 21(10):713-7, 2015 Oct. Epub 2015

研究分担者

鯉渕智彦

Furukawa R, Adachi E, Kikuchi T, Koga M, Iwamoto A, Koibuchi T. Methemoglobinemia in an HIV-infected patient treated with primaquine for *Pneumocystis jirovecii* pneumonia. The Journal of AIDS Research. 17: 97-100, 2015.

鯉渕智彦:ヒト免疫不全ウイルス感染症、日本医師会雑誌特別号 143(2)、S390-S393、2014年

Okame M, Takaya S, Sato H, Adachi E, Ohno N, Kikuchi T, Koga M, Oyaizu N, Ota Y, Fujii T, Iwamoto A, Koibuchi T. Complete Regression of Early-Stage Gastric Diffuse Large B-Cell Lymphoma in an HIV-1-Infected Patient Following Helicobacter pylori Eradication Therapy. Clin Infect Dis 58(10):1490-1492, 2014

久慈直昭

土田 奈々枝, 久慈 直昭, 長谷川 瑛, 伊東 宏絵, 井坂 恵一. 拳児希望 HIV 感染男性のプロフィールと不妊治療との関連。日本生殖医学会雑誌 (1881-0098)60(4) P228, 2015 年

由島 道郎, 久慈 直昭, 嶋田 秀仁, 長谷川 瑛, 伊東 宏絵, 田中 守, 浜谷 敏生, 吉村 泰典, 井坂 恵一. HIV 感染精液におけるウイルス洗浄の効果検討 密度勾配溶剤の影響。日本産科婦人科学会雑誌 (0300-9165)67(2), P.883, 2015 年

日ノ下文彦

日ノ下文彦, 秋葉隆, 勝木俊, 戸村成男. 高齢化する血液透析患者の透析実態に関するアンケート調査. 日本透析医学会雑誌 48(6):341-350, 2015 年

日ノ下文彦. 各論 6. HIV 感染症. 透析患者における感染症対策 標準化と個別化. 臨床透析編集委員会編集, 日本メディカルセンター, 東京, p131-139, 2014 年

大山泰宏

Morita T, Oyama Y, Shao-Yi Cheng et al.: Palliative Care Physicians' Attitudes Toward Patient Autonomy and a Good Death in East Asian Countries. Journal of Pain and Symptom Management, 50(2), 190-199, 2015

安尾利彦

安尾利彦, 仲倉高広, 下司有加, 中濱智子, 東政美, 鈴木成子, 白阪琢磨: HIV 陽性者のメンタルヘルスと心理的特性に関連性に関する研究。第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会、2015 年、東京

西川歩美, 安尾利彦, 森田眞子, 大谷ありさ, 宮本哲雄, 下司有加, 白阪琢磨: HIV 感染症患者における初診時のメンタルヘルス等の諸因子と、その後の受診中断の関連性に関する研究。第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会、2015 年、東京

村井俊哉

村井俊哉:メンタルヘルスを学ぶ。ミネルヴァ書房、2015 年

山内哲也

山内哲也 社会福祉施設における HIV 陽性者の受入れに関する福祉施設長の意識と行動プロセス。医療社会福祉研究」第 21 巻 2013 年

下司有加

小川良子, 城下由衣, 木下一枝, 池田有里, 長與由紀子, 城崎真弓, 渡部恵子, 武内阿味, 大野稔子, 成田月子, 杉野祐子, 伊藤ひとみ, 川口玲, 高山次代, 羽柴知

恵子、下司有加、大金美和、池田和子：エイズ診療拠点病院 HIV 担当看護師に対する支援の検討「HIV/AIDS 看護体制に関する調査」結果から（その 1）～患者ケア実施に関する現状と課題～。第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会、2015 年、東京

長與由紀子、城崎真弓、小川良子、城下由衣、木下一枝、池田有里、渡部恵子、武内阿味、大野稔子、成田月子、杉野祐子、伊藤ひとみ、川口玲、高山次代、羽柴知恵子、下司有加、大金美和、池田和子：エイズ診療拠点病院 HIV 担当看護師に対する支援の検討「HIV/AIDS 看護体制に関する調査」結果から（その 2）～患者からの相談と課題、支援ニーズについて～。第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会、2015 年、東京

佐保美奈子

佐保美奈子：病院職員対象の人権研修において、HIV/AIDS を取り上げる意義、人権教育研究 14、119-124、2014 年

高田清式

高田清式、村上雄一、中西英元、末盛浩一郎、山之内純、中尾綾、西川典子：地域における HIV 診療と認知機能障害に関する研究、愛媛医学 34(2)、99-102、2015 年

榎本てる子

榎本てる子：地域における薬物依存症から回復を望む HIV 陽性者に対する牧会ケア—個人の魂の救いと社会正義の視点から—。関西学院大学神学研究会「神学研究第 62 号」pp67-83、2015 年

江口有一郎

江口有一郎、前山恵士郎、尾崎岩太、平井賢治：肝がん：診断と治療の進歩 肝炎診療体制 肝炎対策基本法をうけて、日本内科学会雑誌 (0021-5384)103 巻 1 号 11-18、2014 年

渡邊 大

Watanabe D, Suzuki S, Ashida M, Shimoji Y, Hirota K, Ogawa Y, Yajima K, Kasai D, Nishida Y, Uehira T, and Shirasaka T. Disease progression of HIV-1 infection in symptomatic and asymptomatic seroconverters in Osaka, Japan: a retrospective observational study. AIDS Res Ther. 12:19, 2015.

大北全俊

Okita T, Uncertain Risk, Public Health, and Ethics: Considering the Ethical Framework for HIV Prevention Strategy, Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine, 8, 61-87, 2014

平成 28 年度

研究目的

平成 23 年度、後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針の見直し作業班の報告書およびこれまでの先行研究の成果を踏まえ、本研究では HIV 感染症および合併症で未解決の課題を明らかにし対策を示すことを目的とする。

研究方法

研究目的の達成のために次の研究を行った。柱 1「抗 HIV 療法のガイドラインに関する研究（鯉淵）」では国内外の情報をもとに、改訂委員の意見を総合して抗 HIV 治療ガイドラインを改訂した。柱 2「HIV 陽性者の生殖医療に関する研究（久慈）」では、血中ウイルス量感度以下の症例で洗浄後の沈渣検体中のウイルス遺伝子の有無を検討し、精液洗浄法の改良を試みた。従来の顕微授精による洗浄・妊娠効率を検討した。柱 3「HIV 感染患者における透析医療の推進に関する研究（日ノ下）」では HIV 感染患者が比較的多い大都市圏を中心に透析医療者啓発のための講演会を開催し、HIV 感染症と HIV 血液透

析の理解促進に努めた。講演会ではアンケートを実施し、理解度を評価した。透析医療者の HIV 理解促進の小冊子を作成した。柱 4 HIV 感染者の精神・心理的課題に関する研究の「HIV 陽性者の心理的支援の重要性に関する検討（大山）」では HIV 陽性者の心理社会的問題に関する研究および心理療法の効果測定に関する過去 10 年の研究をレビューし、HIV 陽性者の心理的課題の抽出、心理的課題査定のための心理検査の選択、カウンセリング・心理療法介入の効果測定のための諸指標の選択を行い、HIV 陽性者に対する試行的カウンセリングを臨床心理士より継続的に実施し、そのプロセスと効果を評価した。「精神科医とカウンセラーの連携体制の構築に関する研究（角谷）」では HIV 拠点病院全 384 施設の内科医、精神科医、心理士に郵送による質問紙調査に返送のあった 202 名を対象とし、平成 28 年 7 月～9 月に、属性や連携の実情と満足度、信頼性尺度（天貝、1997）、相互独立的－相互協調的自己観尺度（高田、2000）を調査し、各尺度と紹介経験の有無を比較した。「血液製剤由来 HIV 感染者の心理的支援方法の

検討(藤原)」では患者、チーム医療者のライフストーリーの聞き取りを行った。「HIV 陽性者の心理学的問題と援助に関する研究(安尾)」では大阪医療センター通院中の HIV 陽性者 300 名を無作為抽出し行動化傾向とパーソナリティ特性に関する質問紙調査を実施した。HIV 陽性者を対象とした集団心理療法を実施し、HIV 陽性者の心理的問題および集団心理療法が及ぼす心理的影響を評価した。「MRI 画像による神経認知障害の神経基盤の解明(村井)」では大阪医療センターの HIV 男性患者 50 名、健常男性 50 名に頭部 MRI、神経心理検査を施行し、画像・統計解析を進めた。柱 5 HIV 感染者の長期療養の課題に関する研究の「福祉施設における HIV 陽性者の受け入れ課題と対策(山内)」では社会福祉施設従事者対象の HIV 研修と事後アンケート等で受入れ意識の促進要因の検討、社会福祉従事者向けの HIV 陽性者受入れマニュアルの改訂、地域包括支援センターにおける地域単位での HIV 陽性者の受入れ環境向上を目的としたアクションリサーチを行った。「エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究(下司)」では在宅支援者を対象とした研修会を企画・実施した。また、継続した研修会実施の効果をみるために全国の訪問看護ステーションに HIV 陽性者の受け入れに関する調査を実施した。「介護保険施設の HIV ケアと学校基盤の HIV 予防における拡大戦略の研究(佐保)」では看護職・介護職の研修や高等学校出前講義でのアンケート調査、HIV サポートリーダー養成研修前後の知識・態度の変化について調査した。「地方における病院・福祉療養施設間の HIV 診療連携モデル構築に関する研究(高田)」では急性期病院から福祉施設までの連携モデルの形成と組織構築を研究・検討した。「HIV 陽性者の地方コミュニティでの受け入れに関する研究(榎本)」ではフォーカスグループミーティングの開催を通し、求められている支援の在り方と地域で生活する HIV 陽性者の支援ニーズを掘り出し、体制を構築するために必要な要因を分析する。柱 6「効果的啓発手法の開発に関する研究(白阪)」大阪での男性を対象として啓発手法の開発と評価の検討に取り組んだ。「啓発方法の効果の評価に関する研究(江口)」では平成 27 年度において特定した、HIV 検査受検行動における制御要因に基づくメッセージ案を開発するとともに、MSM(HIV 陽性者 6 名、一般からリクルートした MSM 6 名)のインタビュー調査と HIV 検査のウェ

ブ予約者にウェブアンケート調査を通して案に対する評価を実施した。その他の研究として「HIV 感染症における倫理的課題に関する研究(大北全俊)」データベースおよび関連文献(ジャーナル掲載の論文及びガイドラインなど)の調査をした。研究班全体は白阪が統括した。

(倫理面への配慮)

複数の施設での調査研究等においては患者の個人情報取り扱いには十分留意をすると共に、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守した。

研究結果

柱 1(鯉淵)世界の最新のエビデンスを反映させ国内の実情も考慮した治療ガイドラインの改訂作業中である。柱 2(久慈)治療が良好な 10 例では沈渣にも HIV 遺伝子は検出できなかった。精液洗浄法の改良法の検討を行った。新規患者は 23 例で、16 分娩、18 人の非感染児を得た。柱 3(日ノ下)本研究班の主催もしくは共催で、名古屋、横浜、東京東部(城東地区)、(大宮:予定)で HIV 透析医療の講演会を行い、アンケートでは 97%が「HIV 感染症への理解が深まった」が 97%、「HIV 感染患者の透析に対する理解が深まった」と 96%、「今後の HIV 感染患者受入れ(以前、受入れてなかった施設)」は「可能」が 29%、「検討する」が 55%、「不可能」が 16%であった。小冊子「HIV 感染透析患者受入れに関する疑問にお答えします!!(全 6 頁)」を作成し参加者に配布した。柱 4(大山)① HIV 陽性者のアイデンティティの根幹にかかわる多層的的心理的課題を包括的に配慮した心理的支援はきわめて少ないことが明らかとなった。HIV 陽性者への継続的な試行的カウンセリングと、実際のアセスメントや心理療法プロセスの分析を開始した。(角谷)有効回答数は 196(回答率 17%)で、平成 27 年度の外来 HIV 患者での約 5%が精神科的介入を必要としたが、民間精神科病院入院は 2%に過ぎなかった。(藤原)患者 6 例、チーム医療者 3 例の聞き取り調査を行った。(安尾)質問紙調査票は実施注である。これまでに 22 回の集団心理療法を実施し自己愛の問題の現れと思われる言動が特徴的に認められた。(村井)患者群 44 名、健常群 38 名の検査を終了し、両群間の脳皮質体積の比較で、患者群に有意に($p<0.001$)脳萎縮領域が複数確認できた(右帯状回、右下前頭回等)。柱 5(山内)各地で社会福祉施設従事者対象の HIV 研修を行い、

事後アンケート等で受入れ意識の向上が見られた。群馬県などでは研修後に受入れ実績につながった。社会福祉従事者向け受入れマニュアルを改訂中である。（下司）研修会は 3 地域で実施。訪問看護師以外にケアマネージャー、介護福祉士、保健師などが参加した。HIV ケアや研修会参加の経験がない人が大半であった。今後、HIV 陽性者の受け入れは「可能」48%、「準備が必要」49%であった。全国の登録訪問看護ステーション調査結果では、4724 事業所に配布し、回答数 2001 件（回収率 43.1%）。HIV 陽性者の受け入れを経験は 9%で、受け入れ「可能」19%、「準備が整えば可能」60%、「不可能」19%であった。課題には、職員の理解、教育、感染対策に関する手順の作成などであった。61%の事業所が今後も研修会参加を希望していた。（佐保）研修や出張講義によって HIV 感染症や陽性者への関わり方について、知識や態度の変化があった。（高田）昨年度 3 例に続き今年度も 1 例の受け入れを調整できた。（榎本）5 回の研究会を開催し、具体的な困難ケースを見直すことにより、関西圏において現段階で必要な支援体制を明確にしつつある。柱 6（江口）1) MSM(HIV 陽性者 6 名、一般からリクルート MSM6 名)へのインタビュー調査から“HIV が陽性であっても、今は治療によってエイズ発症を抑えることができる”という情報を、医師からの呼びかけとして率直に伝えた、「いま、HIV では死にません」というメッセージが高い評価を得た。

さらに、ウェブ予約システムを通じて HIV 検査を予約した一般人を対象に、4 つのメッセージ案評価のためのアンケート調査を実施し、メッセージの最終化を行う。（大北）データベースの調査および文献調査から、biomedical prevention をめぐる倫理に関する議論（公衆衛生倫理と研究倫理）の概要を析出した。HIV 検査の議論と同様、予防技術をめぐるエビデンスに沿った倫理的な議論の変遷が見られた。

考 察

初年度の調査結果の分析や課題の抽出に取り組んだ。ガイドライン、マニュアル、ハンドブック等や支援ツールの評価と必要なら改訂を行う。本研究から重要な結果を得た。

自己評価

1) 達成度について

当初計画を概ね実施でき目的を達成できた。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

本研究は HIV 感染症の治療等で課題を明らかにし、その対策につき検討を行うものであり、必要性は高い。いずれも学術的意義も高く、国際的にも新規性が高い。治療のガイドライン改訂など、社会的意義も大きいと考える。

3) 今後の展望について

これまでの研究結果を踏まえさらに研究を深める。

結 論

HIV 感染症の治療と関連分野で課題を抽出し、ほぼ計画通りに研究を実施できた。

健康危険情報

該当なし

知的所有権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

研究代表者

白阪琢磨

Ikuma M, Watanabe D, Yagura H, Ashida M, Takahashi M, Shibata M, Asaoka T, Yoshino M, Uehira T, Sugiura W, Shirasaka T. Therapeutic Drug Monitoring of Anti-human Immunodeficiency Virus Drugs in a Patient with Short Bowel Syndrome. Intern Med. 2016;55(20):3059-3063. Epub 2016 Oct 15.

白阪琢磨. 患者を生きる: 3191 感染症 HIV5 情報編. 朝日新聞 12 版. 33, 2016 年

研究分担者

鯉渕智彦

Ishizaka A, Sato H, Nakamura H, Koga M, Kikuchi T, Hosoya N, Koibuchi T, Nomoto A, Kawana-Tachikawa A, Mizutani T. Short Intracellular HIV-1 Transcripts as Biomarkers of Residual Immune Activation in Patients on Antiretroviral Therapy. J Virol. 90(12):5665-76. 2016

Katoh J, Kawana-Tachikawa A, Shimizu A, Zhu D,

Han C, Nakamura H, Koga M, Kikuchi T, Adachi E, Koibuchi T, Gao GF, Brumme ZL, Iwamoto A. Rapid HIV-1 Disease Progression in Individuals Infected with a Virus Adapted to Its Host Population. *PLoS One*. 11(3):e0150397.2016

久慈直昭

Inoue O, Kuji N, Ito H, Yamada M, Hamatani T, Oyadomari A, Kato S, Hanabusa H, Isaka K, Tanaka M. Clinical efficacy of a combination of Percoll continuous density gradient and swim-up techniques for semen processing in HIV-1 serodiscordant couples. *Asian J Androl*. 2016 Feb 23. doi:10.4103/1008-682X.173442. [Epub ahead of print]

上野 啓子, 久慈 直昭, 長谷川 瑛, 伊東 宏絵, 花房 秀次, 小島 賢一, 加藤 真吾, 井坂 恵一 HIV 陽性男性と HIV 陰性女性の生殖医療における最近の動向 日本受精着床学会雑誌 (0914-6776)33 巻号 Page220-224(2016.08): 原著論文 / 比較研究

伊東 宏絵, 久慈 直昭, 永光 雄造, 吉田 梨恵, 長谷川 瑛, 野平 知良, 名取 道也, 井坂 恵一. HIV 陽性男性と HIV 陰性女性の生殖医療の動向 第 52 回日本周産期・新生児医学会総会 2016.7.16-18. 富山県。 富山国際会議場・富山県民会館・ANA クラウンプラザホテル富山・富山市民プラザ

日ノ下文彦

日ノ下文彦, 秋葉隆, 勝木俊, 戸村成男: 高齢化する腹膜透析患者の透析実態に関するアンケート調査。日本透析医学会雑誌 印刷中, 2017

長谷川頌, 吉田悠, 勝木俊, 多田真奈美, 田嶋強, 日ノ下 文彦: 維持血液透析患者に対して経皮的椎体形成術を施行した 4 症例についての検討。日本透析医学会雑誌 49 (6): 407-412, 2016.

藤原良次

藤原良次, 橋本謙, 山田富秋, 種田博之, 小川良子, 早坂典生, 藤原都, 白阪琢磨: 「血液製剤由来 HIV 感染者の心理的支援方法の検討」 第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2016 年 11 月、鹿児島

藤原良次, 山田富秋: 「血液製剤由来 HIV 感染者の心理的支援方法の検討」 第 42 回日本保健医療社会学会, 2016 年 5 月、茨木

大山泰宏

Tatsuya Morita, Yasuhiro Oyama, Shao-Yi Cheng et al.: Palliative Care Physicians' Attitudes Toward Patient Autonomy and a Good Death in East Asian Countries. *Journal of Pain and Symptom Management*, 50(2), 190-199, 2015.

清水亜紀子, 仲倉高広, 荒木浩子, 高橋紗也子, 田中史子, 野田実希, 古野裕子, 山本喜晴, 大山泰宏: HIV 陽性者のカウンセリングに何が求められているかー効果測定に関する多面的指標の探索ー。第 30 回エイズ学会学術集会・総会, 2016 年 11 月、鹿児島

角谷慶子

角谷慶子, 仲倉高広, 山出健博, 杉森聡子: HIV 陽性者に対する精神科医及び心理カウンセラー、ソーシャルワーカーの関与と連携に関する研究。第 5 回精神科医学学術大会, 2016 年 11 月、仙台

安尾利彦

安尾利彦, 仲倉高広, 下司有加, 中濱智子, 東政美, 鈴木成子, 白阪琢磨: HIV 陽性者のメンタルヘルスと心理的特性に関連性に関する研究。第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2015 年、東京

西川歩美, 安尾利彦, 森田眞子, 大谷ありさ, 宮本哲雄, 下司有加, 白阪琢磨: HIV 感染症患者における初診時のメンタルヘルス等の諸因子と、その後の受診中断の関連性に関する研究。第 29 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2015 年、東京

村井俊哉

村井俊哉: メンタルヘルスを学ぶ。ミネルヴァ書房, 2015 年

山内哲也

山内哲也 社会福祉施設における HIV 陽性者の受入れに関する福祉施設長の意識と行動プロセス。医療社会福祉研究」第 21 巻 2013 年

下司有加

渡邊 大, 上平朝子, 下司有加, 蘆田美紗, 鈴木佐知子, 松本絵梨奈, 新井 剛, 山本雄大, 湯川理己, 廣田和之, 上地隆史, 伊熊素子, 笠井大介, 西田恭治, 白阪琢磨: 当院の HIV 感染者における急性感染期での診断と診断前の受検行動関する後方視的検討。第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2016 年 11 月、鹿児島

竹花 惇, 岡本 学, 下司有加, 中濱智子, 東 政美, 鈴木成子, 上平朝子, 白阪琢磨: 外来受診中 HIV 陽性者の他院受診状況に関する質問紙調査。第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2016 年 11 月、鹿児島

佐保美奈子

佐保美奈子, 古山美穂, 山田加奈子, 高知恵, 岡本友子, 白阪琢磨: HIV サポートリーダー養成研修 7 年間の総括。第 30 回日本エイズ学会, 2016 年 11 月、鹿児島

高田清式

石川朋子、石井幹夫、小野恵子、末盛浩一郎、坂本早輝、滝本麻衣、若松綾、乗松真大、木村博史、井門敬子、高田清式：エイズ診療地域連携を目指した研修会の評価～アンケート調査による研修会有用性の検討～。第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会、2016 年 11 月、鹿児島

坂本早輝、若松綾、滝本麻衣、石川朋子、末盛浩一郎、中尾綾、乗松真大、木村博史、小野恵子、岩村弘子、井門敬子、高田清式：末期脳悪性リンパ腫 AIDS 患者をスムーズに在宅療養へと繋げられた事例。第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会、2016 年 11 月、鹿児島

榎本てる子

『神學研究第 62 号』地域における薬物依存症から回復を望む HIV 陽性者に対する牧会ケア—個人の魂の救いと社会正義の視点から—, 関西学院大学神学研究会, 2015. pp67-83

関西学院大学人権研究』第 21 号「キリスト教主義大学における LGBT 学生に対する人権保障の取り組みに関する調査」(研究ノート) 関西学院大学人権研究室 2016 (予定)

江口有一郎

江口有一郎、前山恵士郎、尾崎岩太、平井賢治：肝がん：診断と治療の進歩 肝炎診療体制 肝炎対策基本法をうけて、日本内科学会雑誌 (0021-5384)103 巻 1 号 11-18、2014 年

大北全俊

加藤穰、大北全俊、遠矢和希、Franziska Kasch：HIV/AIDS の検査に関する倫理的議論の変遷について—海外での文献調査をもとに。第 35 回日本医学哲学・倫理学会大会、2016 年 11 月、兵庫県

平成 29 年度**研究目的**

平成 23 年度、後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針の見直し作業班の報告書およびこれまでの先行研究の成果を踏まえ、本研究では HIV 感染症および合併症で未解決の課題を明らかにし対策を示すことを目的とする。

研究方法

研究目的の達成のために次の研究を行う。柱 1 「抗 HIV 療法のガイドラインに関する研究 (鯉淵)」では主要英文誌や国内外の学術集会等から得た新知見や改訂委員の意見を総合して、本ガイドラインを改訂する。柱 2 「HIV 陽性者の生殖医療に関する研究 (久慈)」では挙児希望 HIV 感染男性・非感染女性夫婦において、従来の洗浄法を用いた顕微授精法、洗浄精子を用いた人工授精、精液中ウイルス検定後のタイミング、あるいは人工授精のいずれでも選択しうる環境作りのための基礎的検討を行う。洗浄精液を用いた人工授精 (顕微授精法) 実施に向けた精子回収法、射出精液中ウイルス検出法の確立、HIV 陰性射出精液を用いた人工授精の更なる検討を行う。柱 3 「HIV 感染患者における透析医療の推進に関する研究 (日ノ下)」では、HIV 感染透析患者受入れの講演活動を継続する。HIV 感染透析患者の血液透

析とその受入れに関し理解の検証のため、全国の透析施設を対象にアンケートを実施する。柱 4 精神・心理的課題に関する研究の「HIV 陽性者の心理的支援の重要性に関する検討 (大山)」では協力の申し出があった HIV 陽性者に対し試行的な継続的カウンセリングを 25 セッション行い、各事前、中間、事後に複数の心理面・行動面の指標によりアセスメントを行う。「精神科医とカウンセラーの連携体制の構築に関する研究 (角谷)」では日本精神科病院協会会員施設への無記名質問紙調査と HIV 医療従事者と精神科医療従事者の協働の研修会開催と参加者への意識調査を行う。「血液製剤由来 HIV 感染者の心理的支援方法の検討 (橋本)」では地域性、世代、通院先、治療経験・症状等を考慮し、患者インタビュー調査を実施する。なお、必要に応じてチーム医療スタッフに対するインタビュー調査の実施、過去の患者実態調査の資料を加えて分析・検討する。「HIV 陽性者の心理学的問題と援助に関する研究 (安尾)」では、無作為抽出した 300 名に質問紙を配布し、自傷や自殺など行動面の障害を伴う問題の有無と心理尺度の関連を検討する。HIV 陽性者の集団心理療法を実施しプロセスを分析する。「MRI 画像による神経認知障害の神経基盤の解明 (村井)」では大阪医療センターの HIV 陽性男性患者 50 名、対症群男性 50 名に頭部

MRI、神経心理検査を施行し、画像・統計解析を行う。

柱5 長期療養課題に関する研究の「福祉施設における HIV 陽性者の受け入れ課題と対策(山内)」では、社会福祉施設従事者を対象に HIV/AIDS 研修を行い、事後アンケート等で受入れ意識の促進要因を検討する。地域包括支援センターにおける地域単位での HIV 陽性者の受入れ環境向上を目的にアクションリサーチを行う。「エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究(下司)」では、前回の全国調査の回答で「受け入れ可能」が少ないか、「受け入れ不可能」が多い都道府県を対象に訪問看護師研修会を実施する。「介護保険施設の HIV ケアと学校基盤の HIV 予防における拡大戦略の研究(佐保)」では HIV 予防とケアの向上のために、看護職のボトムアップを行い、高校生や介護職への啓発教育を企画・実施・検討する。「地方における病院・福祉療養施設間の HIV 診療連携モデル構築に関する研究(高田)」では、急性期病院から福祉施設までの連携モデルの形成と組織構築を研究・検討する。「HIV 陽性者の地方コミュニティでの受け入れに関する研究(榎本)」では、関西圏で福祉施設を運営する社会福祉法人、HIV 拠点病院医療関係者、地域で活動するケアマネージャー、HIV 関係の NPO、当事者、研究者、HIV 陽性者が参加する研究会を開催し、HIV 陽性者が利用可能な介護保険、就労支援制度について検討する。柱6 「効果的啓発手法の開発に関する研究(白阪)」では大阪での MSM を含む一般男性を対象とした啓発手法の開発として作成したポスターや FM ラジオを用いた啓発を行い、その効果の評価につき検討をする。「啓発方法の効果の評価に関する研究(江口)」では、ソーシャルマーケティング手法を用い、インターネット調査によるターゲットの特定、インタビュー調査による行動変容促進要因の明確化、プロのクリエイターとのメッセージ開発、インターネット調査でのメッセージ検証、インターネットでのデジタルマーケティング、インターネット上での行動のトラッキングと評価を進める。その他、「HIV 感染症における倫理的課題に関する研究(大北)」ではデータベースおよび関連文献(ジャーナル掲載論文やガイドラインなど)の調査を行う。研究全体は白阪が統括する。

(倫理面への配慮)

調査研究等においては患者の個人情報の取り扱いには十分留意をすると共に、「人を対象とする医学系

研究に関する倫理指針」を遵守する。

研究結果

柱1(鯉淵) ガイドライン改訂は作業中である。2017年10月に、新規薬剤 TAF/FTC および DRV/cobi の臨床試験結果を研究班 HP に掲載した。柱2(久慈) 2017年に21件の精液洗浄を行い、全例で HIV を除去できた。洗浄精子を用い84例で採卵を行い、12妊娠をえた。洗浄凍結精液による人工授精については、二重管を用いた洗浄法を検討中、射出精液の HIV 検出法確立については検出感度の信頼性を検定中である。柱3(日ノ下) 大都市圏に次いで HIV 感染症者が多い地域である静岡で講演会を開催(72名が聴講)し、埼玉東部透析療法研究会でも講演した。2017年10月、全国の透析施設にアンケートを郵送し、12月末までに回収し、アンケート結果を集計中である。柱4(大山)。2例の試行的カウンセリングが終了し、3例目が進行しつつある。事例数は少ないものの、他者への基本的信頼感の持ちにくさに関するテーマがカウンセリング経過の中で展開することが浮かび上がった。カウンセリング効果として抑うつ気分や不安の改善がみられた。(角谷) 1,204施設への質問紙調査を郵送し有効回答数192であった。精神科病院からの回答が95%で約90%が HIV 陽性者の受け入れ経験の無い施設であった。半数が入院受け入れ困難と考えていた。その理由は、バックアップ体制への不安(57%)、職員への感染不安(53%)、経済面での負担(47%)が高かった。研修会は定員60名に58名の参加者があり、精神科病院と保健所からの参加者が多かった。(橋本) これまでの調査では患者27例、国立九州医療センターチーム医療スタッフ4例(医師、看護師、心理士、SW)のインタビューが終了した。当事者(ピア)、社会学者、臨床心理士、看護師で多角的に分析した。インタビュー調査を通じ薬害 HIV 感染被害者は、自分でも表現できないような不安感や虚脱感を抱えていることがわかった。(安尾) 無就労や自傷には自尊感情の低さが、自傷、コンドーム不使用には私的自意識(情緒への関心)の低さが関連した。受診中断、服薬、飲酒は心理尺度との関連がなかった。集団心理療法の参加者には万能的な相互理解の確信、自身の問題を指摘された際の憤怒、他者の価値下げ、自他融合などが認められた。(村井) 検査終了患者群44名と対症群38名の画像を使用し解析中。神経心理検査のドメイ

ンの一つである視覚統合の検査成績と MRI 画像から得られた灰白質体積との間で有意な相関領域を検出した（右角回、 $p < 0.001$, uncorrected）。柱 5（山内）全国各地で社会福祉施設従事者対象の HIV/AIDS 研修を行い、事後アンケート等から受入れ意識の向上が見られた。研修受講後、東京都・千葉県・群馬県などで受入れ実績につながった。（下司）研修会への参加状況は、静岡（7/1）が申し込み者 24 名、参加者 16 名。京都（9/2）が申し込み者 19 名、参加者 17 名、大分が（10/28）申し込み者 8 名、参加者 5 名であった。参加者の背景は 40 ～ 50 歳代の訪問看護師および保健師が中心だった。過去研修受講者が 33%、HIV 陽性者受け入れ経験者が 26%であった。研修会参加で HIV 陽性者の受け入れ意識が変化したとの回答は 68%、以前から支援したいと考えており、変化していないとの回答は 22%であり、他方。以前から支援は困難と考えており変化していないという回答は 0%であった。今後の HIV 陽性者の受け入れについては 53%が可能、36%が準備が整えば可能と回答し、受け入れ不可能という回答はなかった。参加者の 96%が継続的な研修会の開催を希望していた。（佐保）HIV サポートリーダー養成研修は大阪府に加え、京都府、奈良県、兵庫県、滋賀県、三重県からの受講者も増加した。毎年、事後アンケート等で受講生から高い評価を得ており、HIV/エイズ教育だけでなく、高校生への性教育講座の協力者も増加している。（高田）2 年前から今年度に至る研究で各病院や福祉施設間の密な連携が図られ、介護・療養が必要な HIV 患者の受け入れに前向きな傾向が得られつつある。以前の 3 例、28 年度 1 例、今年度も緊喫に極めて綿密な介護・療養が必要な患者 1 例の受け入れが行われた。今年度 2 施設での出張研修を行い、連携活動を継続中。（榎本）今年度 4 回研究会を開催し、高齢化する HIV 陽性者の生活支援に必要な公的援助に関する研究を行った。介護保険、就労支援、障害者総合支援法等の制度は、制定の背景や運用の責任行政部局が異なり包括的支援体制構築の 1 つの弊害の可能性が指摘された。柱 6（白阪）開発したポスター等や FM ラジオを用いた啓発を行い、その効果評価の仕組みを試行的に構築し評価を進めている。（江口）HIV 検査受検勧奨の啓発にデジタルマーケティングは効果的であり、メッセージに曝露したターゲットの一定割合（約 2 万 5 千人の 5%：2018 年 1 月 6 日時点）が“検査施設の検索行動”という

具体的な行動変容に繋がったことが確認された。（大北）日本での HIV/AIDS に関する報道記事検索による関連記事数の年次推移は、薬害裁判和解に関する記事が多くを占める 1996 年が突出していたことを除くと、1992 年で突然に増加し、その後横ばいから減少傾向にある事がわかった。

考察

これまでの調査結果の分析や課題の抽出に取り組んだ。ガイドライン、マニュアル、ハンドブック等や支援ツールの評価を行い、必要な改訂を行う。啓発の研究から一定の効果のある手法の開発の手がかりを得た。各研究から重要な結果を得たと考える。

自己評価

1) 達成度について

計画を概ね実施でき目的を達成できた。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

本研究は HIV 感染症の治療等で課題を明らかにし、その対策につき検討を行うものであり、必要性は高い。いずれも学術的意義も高く、国際的にも新規性が高い。治療のガイドライン改訂など、社会的意義も大きいと考える。

3) 今後の展望について

研究結果を踏まえさらに研究を深める。

結論

HIV 感染症の治療と関連分野で課題を抽出し、ほぼ計画通りに研究を実施できた。

健康危険情報

該当なし

知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし

研究発表

研究代表者

白阪琢磨

白阪琢磨：患者を生きる . 3191 感染症 HIV5 情報編 . 朝日新聞 12 版 . 33, 2016 年

Watanabe D, Yamamoto Y, Suzuki S, Ashida M, Matsumoto E, Yukawa S, Hirota K, Ikuma M, Ueji T, Kasai D, Nishida Y, Uehira T, Shirasaka T. Cross-

sectional and longitudinal investigation of human herpesvirus 8 seroprevalence in HIV-1-infected individuals in Osaka, Japan. *J Infect Chemother*. 2017 Apr; 23(4):201-205. doi: 10.1016/j.jiac.2016.12.007. Epub 2017 Jan 26

Kawado M, Hashimoto S, Oka S, Fukutake K, Higasa S, Yatsushashi H, Ogane M, Okamoto M, Shirasaka T. Clinical Improvement by Switching to an Integrase Strand Transfer Inhibitor in Hemophiliac Patients with HIV: The Japan Cohort Study of HIV Patients Infected through Blood Products. *The Open Aids Journal* 2017 Apr 26; 11:18-23. Itoi-Ochi S, Hayashi M, Yamaoka T, Kobayashi Y, Isei T, Shirasaka T, Katayama I. Occult HIV infection in Japanese rupioid psoriasis. *J Dermatol*. 2017 Jul, 44(7): e172-e173. doi: 10.1111/1346-8138.13850. Epub 2017 Apr 28.

研究分担者

鯉渕智彦

Iwamoto A, Taira R, Yokomaku Y, Koibuchi T, Rahman M, Izumi Y, Tadokoro K. The HIV care cascade: Japanese perspectives. *PLoS One*. 2017 Mar 20;12(3):e0174360.

鯉渕智彦：シンポジウム「治療の手引き」 暴露後 HIV 感染予防対策。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、2017年11月、東京

古賀道子、菊地正、佐藤秀憲、安達英輔、鯉渕智彦、四柳宏：AIDS 指標疾患と非 AIDS 指標疾患の後方視的研究。第31回日本エイズ学会学術集会・総会、2017年11月、東京

久慈直昭

Inoue O, Kuji N, Ito H, Yamada M, Hamatani T, Oyadomari A, Kato S, Hanabusa H, Isaka K, Tanaka M. Clinical efficacy of a combination of Percoll continuous density gradient and swim-up techniques for semen processing in HIV-1 serodiscordant couples. *Asian J Androl*. 2016 Feb 23. doi:10.4103/1008-682X.173442. [Epub ahead of print]

久慈直昭、高見澤重篤、長谷川朋也、小島淳也、伊東宏絵、須藤弘二、加藤真吾、井坂恵一。MS 管を用いた swimup 法における精子回収率改善。第58回日本卵子学会学術集会、沖縄、2017年6月

日ノ下文彦

日ノ下文彦、HIV 感染患者の透析医療、日本透析医学会雑誌 32：506-511, 2017

日ノ下文彦、勝木俊、照屋勝治、塩路慎吾、別府寛子、坂本絵美、赤木祐一朗、三谷佑望、多田真奈美：HIV 感染透析患者受入れのための講演会の意義について－アンケートの結果報告、日本透析医学会雑誌（投稿中）

橋本 謙

藤原良次、橋本謙、山田富秋、種田博之、小川良子、早坂典生、藤原都、白阪琢磨：「血液製剤由来 HIV 感染者の心理的支援方法の検討」第30回日本エイズ学術集会・総会、2016年11月、鹿児島

山田富秋、藤原良次（故人）、橋本謙、種田博之、小川良子、早坂典生、藤原都、白阪琢磨、「血液製剤由来 HIV 感染者の心理的支援方法の検討」。第31回日本エイズ学術集会・総会 2017年11月、東京

大山泰宏

清水亜紀子、仲倉高広、荒木浩子、高橋紗也子、田中史子、野田実希、古野裕子、山本喜晴、大山泰宏：HIV 陽性者のカウンセリングに何が求められているか－効果測定に関する多面的指標の探索－。第30回エイズ学会学術集会・総会、2016年11月、鹿児島

角谷慶子

角谷慶子、仲倉高広、山出健博、杉森聡子：HIV 陽性者に対する精神科医及び心理カウンセラー、ソーシャルワーカーの関与と連携に関する研究。第5回精神科医学学術大会、2016年11月、仙台

安尾利彦

水木薫、安尾利彦、西川歩美、白阪琢磨：HIV 陽性者の行動面の障害を伴う問題の心理学的背景に関する研究。第31回日本エイズ学会学術集会総会、2018年11月、東京

村井俊哉

村井俊哉：メンタルヘルスを学ぶ。ミネルヴァ書房、2015年

山内哲也

山内哲也：「HIV/AIDS ソーシャルワーク 実践と理論への展望」P228-241 中央法規出版、2017年

下司有加

竹花 惇、岡本 学、下司有加、中濱智子、東 政美、鈴木成子、上平朝子、白阪琢磨：外来受診中 HIV 陽性者の他院受診状況に関する質問紙調査。第30回日本エイズ学会学術集会・総会、2016年11月、鹿児島

佐保美奈子

佐保美奈子、古山美穂、山田加奈子、高知恵、岡本友子、白阪琢磨：HIV サポートリーダー養成研修 7 年間の総括。第 30 回日本エイズ学会、2016 年 11 月、鹿児島

泉柚岐、佐保美奈子、西口初江、豊島裕子、井田真由美、井内公仁子、熊谷祐子、岡本友子、白阪琢磨：介護保険施設における感染症予防研修。第 31 回日本エイズ学会、2017 年 11 月、東京

高田清式

石川朋子、石井幹夫、小野恵子、末盛浩一郎、坂本早輝、滝本麻衣、若松綾、乗松真大、木村博史、井門敬子、高田清式：エイズ診療地域連携を目指した研修会の評価～アンケート調査による研修会有用性の検討～。第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会、2016 年 11 月、鹿児島

小野恵子、末盛浩一郎、古川泰弘、若松綾、武田怜子、芝田佳香、乗松真大、木村博史、中尾綾、山岡多恵、井門敬子、高田清式：エイズ診療地域連携を目指した研修会～アンケート調査による研修会有用性の検討 第 2 報～。日本エイズ学会、2017 年 11 月、東京

榎本てる子

榎本てる子、岡嶋宙士、工藤万里江：『関西学院大学人権研究』第 21 号「キリスト教主義大学における LGBT 学生に対する人権保障の取り組みに関する調査」（研究ノート）関西学院大学人権研究室、2017 年

江口有一郎

江口有一郎、前山恵士郎、尾崎岩太、平井賢治：肝がん：診断と治療の進歩 肝炎診療体制 肝炎対策基本法をうけて、日本内科学会雑誌 (0021-5384)103 巻 1 号 11-18、2014 年

大北全俊

加藤穰、大北全俊、遠矢和希、Franziska Kasch：HIV/AIDS の検査に関する倫理的議論の変遷について－海外での文献調査をもとに。第 35 回日本医学哲学・倫理学会大会、2016 年 11 月、兵庫